

EP_003 ■居心地のいい場所（7分30秒以上）

【状況説明】（1分30秒）

ヒロユキの回想。小学3年、ヒロユキが前の学校にいたとき。ヒロユキが学校でいじめられている。

学校の廊下

001	・弁当を取り上げられるヒロユキ ●激しく抵抗しながら	ヒロユキ	「返せよ！」
002	●上から視線で	不良少年A	「へっ、返してほしかったら自分で取ってみろよ」
003	・上に持ち上げられた弁当箱を取ろうとする	ヒロユキ	「いいから返せっ」
004	●馬鹿にするように	不良少年A	「なんだよ、届かないのか？チビ」
005	●楽しそうに笑う	不良少年B	「ほらほら、もうちょっとだ。はははっ」
006	・少年Aを蹴るヒロユキ	ヒロユキ	「返せ！」
007	・蹴り返す少年A	不良少年A	「イテっ。この、やりやがったな！」
008	・腹を膝蹴りされる	ヒロユキ	「うっ」
009	・「なんだよ」のあたりで蹴る	不良少年B	「ふん。チビのくせに生意気なんだよ」

学校の廊下	010	・少年Bにも蹴られるヒロユキ	ヒロユキ	「うあつ」
	011	●見下して	不良少年A	「お前のそういう、弱いくせして反抗的どころがムカツクんだ」
	012	●いじめることに興奮めしたように	不良少年B	「行こうぜ」
	013	・立ち去っていく2人	不良少年A	「ああ」
	014	●苦しそうに	ヒロユキ	「母……さん」
	015	●思い出すようによく溜めて	ヒロユキナレ	「俺は転校してくる前の学校でいじめられていた。誰も助けてくれなかった。それどころか、今まで仲良くしてた友達すら俺のもとから去って行ってしまった。裏切られた、そう思った。だから、そのころの俺は、もう友達なんていらなないと思ってたんだ」
	016	・タイトルコール	ヒロユキナレ	「居心地のいい場所」
<p>【状況説明】（1分10秒） 回想終了。2次回想開始。小学4年、ヒロユキがケンジたちの学校に転校してきた。</p>				
教室	017	・チャイムが鳴る	小学担任	「今日からこのクラスのお友達になるヒロユキくんです。みんな仲良くしましょうね」

教室	018		児童A	「はい」
	019		児童B	「はい」
	020		児童C	「はい」
	021	・小学4年なので、多少声を高めに	ケンジ	「はい」
	022		トモキ	「はい」
	023		レイカ	「はい」
	024		小学担任	「じゃあ、ヒロユキくんからなにか一言あるかな？」
	025	●仏頂面で、けれども怒ってるわけでもなく	ヒロユキ	「いや、別に……」
	026	●ちょっと焦って	小学担任	「えっと……じゃあ、そこのケンジくんの隣の空いてる席に座って」
	027 028	・黙って席に向かうヒロユキ ●ヒソヒソ	児童A	「なんか暗くねー？」 「どっから来たのかな」
	029 030		児童B	「怖ーい」 「どこの制服だろう」

教室	031 032		児童C	「ちっちゃいな」 「感じわるー」
	033	(環境音)	小学担任	「はい静かに。授業を始めますよ。教科書の37ページを開いて……じゃあレイカちゃん、読んでみようか」
	034	・起立して、教科書を読む ・小学3年生のゆっくり、丁寧な読み方 (環境音)	レイカ	「はい。ある朝目覚めると、わたしはウサギになっていました。ふさふさの毛が全身をまとい、長い耳が頭についていました。わたしは驚きましたが、同時に、少しうれしく感じました。自由になれた、と思ったからです。わたしは窓から外に出ると、一目散に駆けていました」
	035		ケンジ	「俺ケンジ、よろしくな」
	036	・ケンジが挨拶をするも、ヒロユキは黙っている ●不機嫌そうに	ケンジ	「な……シカトかよ」
	037		ヒロユキナレ	「もうあんな思いはしたくない。どうせ突き放されるなら、はじめから仲良くなんかしたくなかった。もう、誰とも関わりたくなかったんだ」

	【場所移動】(1分00秒) 体育館。体育の授業でバスケットをしている。ケンジとヒロユキは同チーム。			
体育館	038	・バスケットの試合中、ケンジにパスを送る	児童 A	「ケンジパス！」
	039		ケンジ	「おう」
	040	・最後の「うわっ」でボールを奪われる	ケンジ	「よし、このまま……うわっ」
	041	●自慢げに	児童 C	「へっへーん」
	042		ケンジ	「このやろっ……ヒロユキ、行ったぞ！」
	043	●楽しそうに	児童 C	「取れるもんなら取ってみなー」
	044	・走りだして児童 C に向かっていく (自由演技)	ヒロユキ	「……っ」
	045	・軽やかにボールを奪うヒロユキ	児童 C	「えっ……」
	046	・ヒロユキがレイアップシュートを決めてホイッスルが鳴り響く ●驚いて唾然とするかんじ	ケンジ	「おお……」
	047	●少しはしゃいで	レイカ	「すごーい！」
048	●ぼそっと	トモキ	「なかなかやるな」	

体育館	049	・ヒロユキのところに駆け寄るケンジ ●少し興奮して	ケンジ	「すげーなお前！バスケやってるのか？」
	050	●照れながらも、気を許したくないという思いで	ヒロユキ	「いや、別に。このくらい……普通だし」
	051		ケンジ	「そんなことねーって。すげーよ。こう片手でスイ っと決めちゃうんだもんなあ。なあ、今度あれ教 えろよ」
	052		ヒロユキ	「え……いいけど」
	053		ケンジ	「よっしゃ。じゃ、行くぞほら」
	054	●流れに身を任せて	ヒロユキ	「え、あ……うん」
	055	・セリフ 051 の途中からナレーションが入る ●静かに	ヒロユキナレ	「優しくするなよ。どうせ最初だけだろ？そのうち お前も、俺のこと裏切るんだ」
【場所移動】(0分40秒) 教室。ヒロユキがいろいろ思い出している。				
教室	056		ヒロユキナレ	「それからというもの、ケンジは俺によく話しかけ てくるようになった」
	057	・シーンフラッシュ	ケンジ	「なあ、一緒に帰ろうぜ」

教室	058	・シーンフラッシュ (屋上)	ケンジ	「ヒロユキ、こいつらはトモキとレイカ」
	059		ヒロユキ	「……よろしく」
	060		トモキ	「どーも」
	061		レイカ	「よろしくね。あ、そうだ。今度みんなで夏祭り行かない？」
	062		ケンジ	「おう、行こうぜ。ヒロユキも行くだろ？」
	063	●どうしようか迷いながら	ヒロユキ	「え……うん」
	064	●笑顔で	ケンジ	「よし決定な」
	065		レイカ	「なに着て行こうかなー」
	066		トモキ	「去年浴衣買ってもらったじゃん」
	067		ケンジ	「俺はどうしようかなー」
	068		トモキ	「買ってもらえば？金持ちでしょ」
	069		ケンジ	「金持ちじゃねーよ」

教室	070		ヒロユキナレ	「トモキやレイカを紹介されて、みんなで夏祭りにも行った。あまり話さなかった俺に、ケンジたちは明るく接してくれた。そこはとても居心地がよくて、でも、いつかなくなってしまうんじゃないかと思うと、もう一步が踏み出せなかったんだ」
<p>【時間経過】(0分30秒)</p> <p>教室周辺。廊下でヒロユキの目の前に上級生が現れる。</p>				
教室周辺	071	・教室を出て上級生にぶつかるヒロユキ	ヒロユキ	「痛っ……」
	072	●険悪な顔で	上級生 A	「おいお前、ちょっと来い」
	073	・遠くでヒロユキを見つけるトモキ ●あまり興味なさそうに	トモキ	「あ、ヒロユキだ。隣にいるのは……6年？何やってんだろ。ま、いっか」
	074	・教室に入るトモキ	ケンジ	「あ、トモキ。ヒロユキ知らねえ？」
	075		トモキ	「ヒロユキなら廊下にいたよ。なんか6年と話してたみたいだったけど」
	076	●不思議そうに	ケンジ	「ヒロユキが6年と？」
<p>【場所移動】(1分50秒)</p> <p>体育館裏。ヒロユキは壁に押し付けられるように上級生に迫られる。</p>				

体育館裏	077		上級生 A	「なあ転校生。お前、ちょっと運動ができるからってなんか調子に乗ってないか？」
	078	●あくまで反抗的に	ヒロユキ	「そんなことはありません」
	079		上級生 B	「うそつけ！お前みたいなすかした奴見るとムカツクんだよ！」
	080	・セリフ 009、011 がフラッシュバック	ヒロユキ	「じゃあどうすればいいんですか？」
	081	●殴ろうとしながら	上級生 A	「だからそういうところが気に食わないって言ってんだろ！」
	082	●大声で。なんか思い出したように	ケンジ	「あーっ！！」
	083		上級生 A	「ん？」
	084		上級生 B	「誰だ」
	085		ケンジ	「あ、すいません。お取り込み中でしたか。いやね、今からこの辺をうちのクラスで掃除することになってるんですよ。もちろん先生も一緒に。いや、ここ使ってるならいいんです。掃除は後からでも出来ますから」
	086	・つかんでいた胸ぐらを離す	上級生 A	「……、行くぞ」

体育館裏	087		上級生 B	「あ、ああ」
	088	・立ち去っていく上級生たち ●笑いながら	ケンジ	「いやあ、あの無口なヒロユキが6年と話してるってトモキから聞いて、何事かと思って探したぞ。そしたらほんとに絡まれてるんだもんな、驚いたよ」
	089	●むすっと	ヒロユキ	「……なんで助けたんだよ」
	090		ケンジ	「ん？」
	091	●さっきよりも少し声を張って	ヒロユキ	「なんで助けたんだよ！」
	092	●当然のことのように	ケンジ	「だって友達じゃん」
	093		ヒロユキ	「え？」
	094		ケンジ	「友達が困ってんのに見過ごせるわけないだろ？」
	095		ヒロユキ	「友達？」
	096		ケンジ	「ああ。少なくとも俺は、お前のこと友達だと思ってる。トモキやレイカも同じだと思うぜ」
096	●小さな声で	ヒロユキ	「……ありがとう」	

体育館裏	098		ケンジ	「ん？なんか言ったか？」
	099	●すっきりしたような笑顔で	ヒロユキ	「いや、なんでもない」
	100		ケンジ	「はあ？言えよ」
	101		ヒロユキ	「言わない」
	102		ケンジ	「言えって」
	103		ヒロユキ	「絶対言わない」
	104		ヒロユキナレ	「すごく嬉しかった。だから少しだけ、信じたいと思ったんだ」
<p>【状況説明】（0分50秒） 回想終了。ケンジたち4人は屋上でたむろっている。</p>				
屋上	105	●いつものおちゃらけた感じで	ヒロユキ	「だー、あっちい」
	106		ケンジ	「暑いな」
	107		トモキ	「ケンジのせいだよ」
	108		ケンジ	「何で」

屋上	109		トモキ	「だって、ほら、なんか出てそうじゃん。体から」
	110		ケンジ	「なんもでてねーよ！」
	111		レイカ	「あはは。暑いのに元気だね、2人とも」
	112	・ここからフェードアウト	ヒロユキ	「あ、そういえば宿題するの忘れてた。れーたん見せて」
	113		レイカ	「だめ。自分でやりましょー」
	114		ヒロユキ	「ええー。じゃあトモっち」
	115		トモキ	「え？俺も終わってない」
	116		ヒロユキ	「えー。じゃあ、しょうがないなあ。ケンちゃんに見せてもらうよ」
	117		ケンジ	「まだ誰も見せるって言ってねーよ」
	118	●語るように ●最後は十分溜めて	ヒロユキナレ	「あれから5年。俺はみんなと変わらない毎日を送っている。正直不安はあるけど、それ以上に分かったことがあるんだ。この場所は、とても居心地がいい」